

No. 037

金井三男のこだわり星座神話

カルピスとアクエリアス

ギリシャ語では、水瓶のことをヒュドリアまたはカルピスという。みずがめ座の学名は、Aquarius (アクエリアス)。清涼飲料水にも同名のものがあるが、直接的に「水そのもの」をさしており、瓶の意味を持つわけではない。なお、清涼飲料水といえば「カルピス (商品名)」があるが、その場合のカルピスがカルシウムを豊富に含む乳飲料という意味で命名されたものであるらしいので、同じ発音で同じつづりだが直接の関係はない。



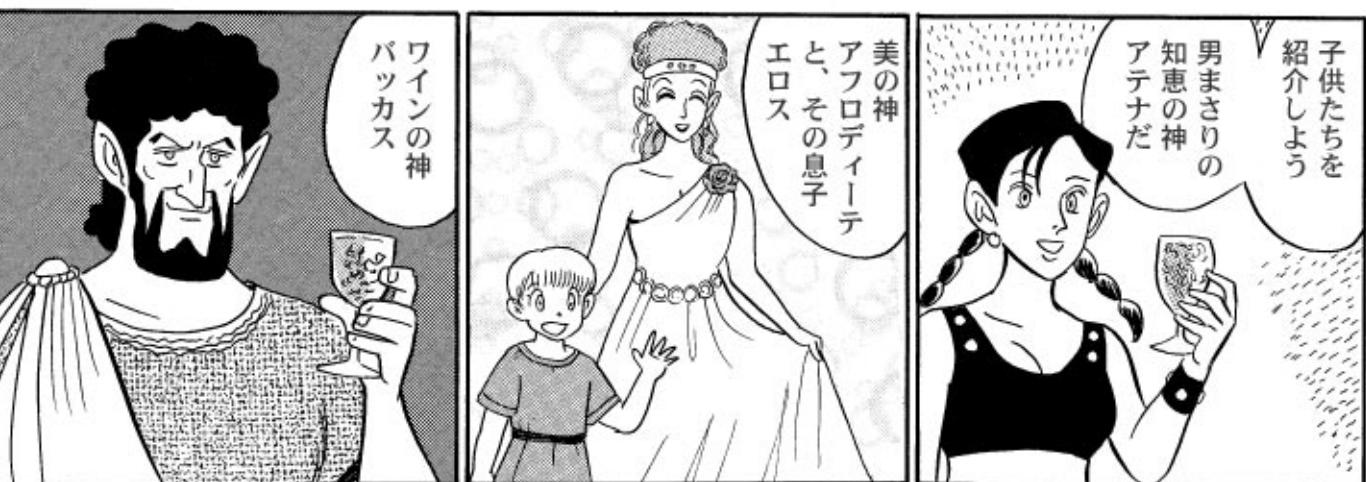
No. 036
金井三男のこだわり星座神話
ネクターを注ぐ美少年

みずがめ座の瓶はギリシャ人が好んで飲んだネクター（甘い葡萄酒）の水割りを入れる瓶で、大鷦（わし）に化けたゼウスが、美少年ガニメデを攫ったのは神々が持つ杯にそれを注がせるためだった。古代ギリシャとローマでは、水割りネクターが高貴な人の飲み方で、原液の葡萄酒は飲んだくれか粗野な人間が飲むものだった。当時の葡萄酒は、水割りにしないとアルコール度が高すぎ、しかも不味く、飲めたシロモノではなかったという。



正調ギリシア神話では
わし座、みずがめ座

ゼウスはトロイの美しい王子ガニメデを、鷲に変身してさらい、神々の宴の席で酒をつぐ役割を与えた。宴にはゼウスの妻ヘラや伝令の神ヘルメス、愛と美の女神アフロディーテとその息子のエロス、森と羊飼いの神パンなど多くの神々が参加していた。彼らはガニメデの美しさを褒め称え、ゼウスは彼に永遠の美貌と若さを約束した。ガニメデの姿はみずがめ座となり、ゼウスの変身した鷲の姿はわし座となったという。



No.038
金井三男のごだわり星座神話
雨の恵みをもたらす星座

みずがめ座はエジプトでは重要な意味を持つ星座だった。太陽がこの星座に侵入する頃、雨季になったからである。砂漠のような乾燥地帯での雨季（エジプトでは12～1月）は、日本のような温暖湿润な地域とはまったく異なり、みずがめ座は恵みの川・ナイルの女神のしとされたほど重要視されるに至ったのである。だが、占星術に伴ってこの星座がエジプトとは気候が異なるギリシャに伝播された時、雨季との関係は絶たれた。



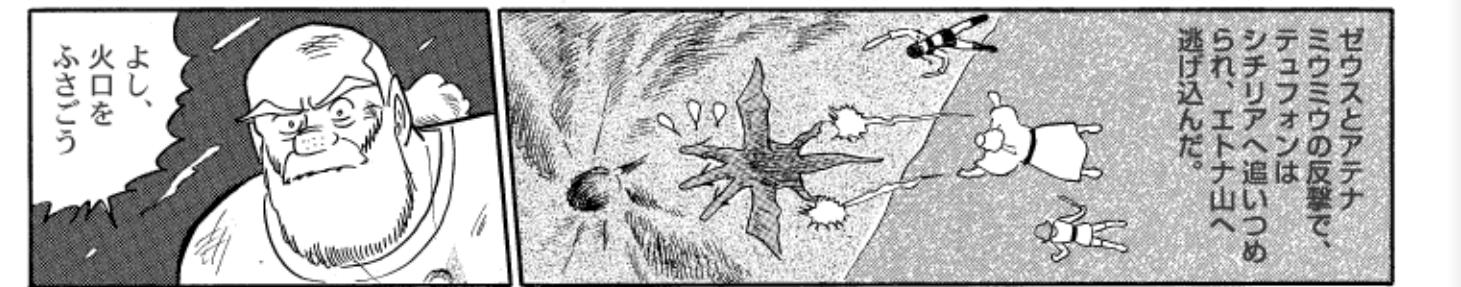
No. 040
金井三男のごだわり星座神話
神々の変身の術

テュフォンを襲撃する際、慌てて変身したのはバーンばかりでない。伝令の神ヘルメスはトキ（馬だったとも言われる）に、太陽神アポロンは大力士に、月の女神アルテミスは猫に変身した。大力士は、エジプトの太陽神ラーの象徴だったハヤブサと混同されたらしく、トキや猫がエジプトで神聖視されていた動物であることと合わせて、エジプトからの何らかの影響が考えられそうだ。エリダス川はナイル川と同一視されることもある。



No. 039
金井三男のごだわり星座神話
火山怪獣テュフォン

テュフォンについてヘシオドスは、次のように表現している。「肩から百本の蛇と竜の首が生え、黒い舌をチョロチョロと出し、両目からは火を噴く。腕力も極端に強く、表現すら難しいヘンテコなノイズを発して突進てくる」。日本産怪獣ならキングギドラに近い容姿だろうか。生まれは地中。大地が割れて誕生してきた。テュフォンからは血が流れ出していたといい、これを溶岩流とすれば、テュフォン＝火山爆発だと考えると良さそうだ。



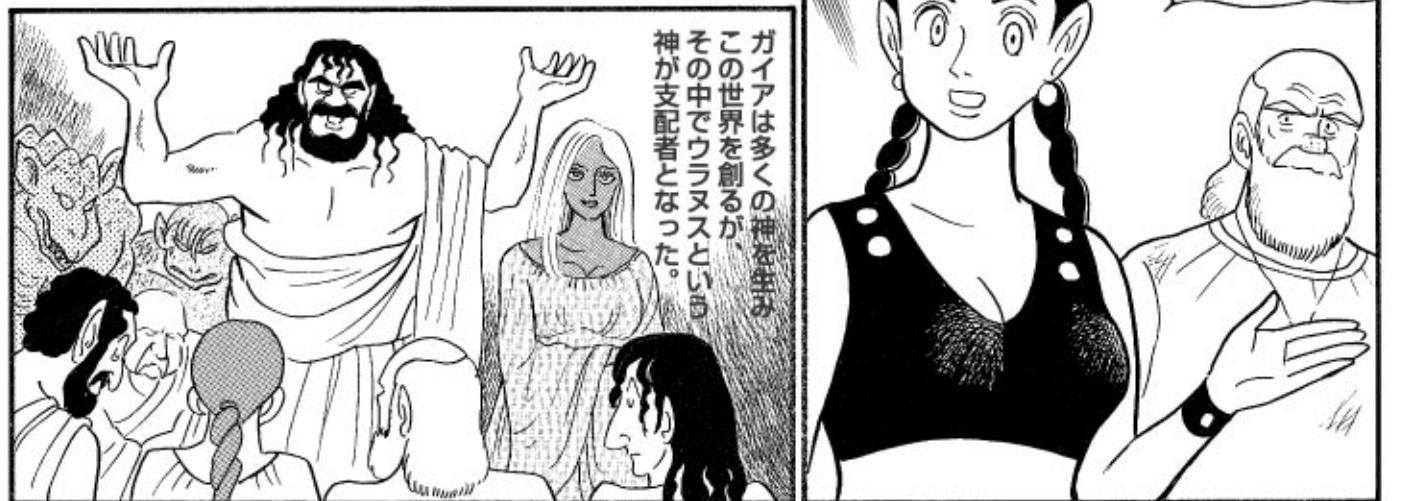
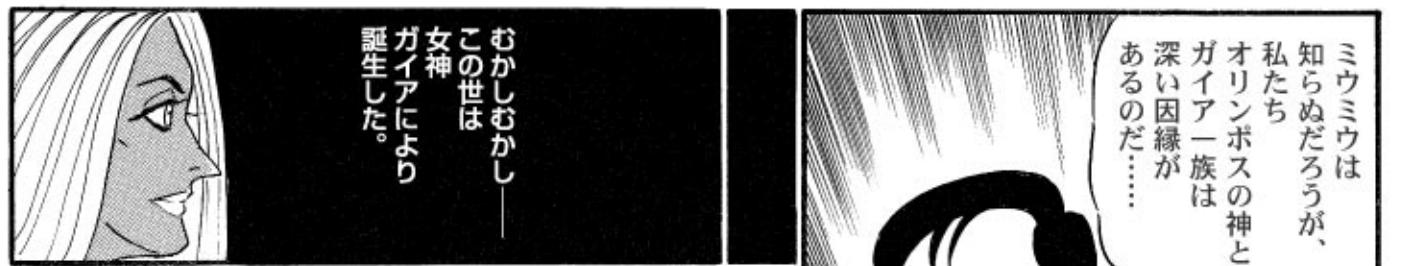
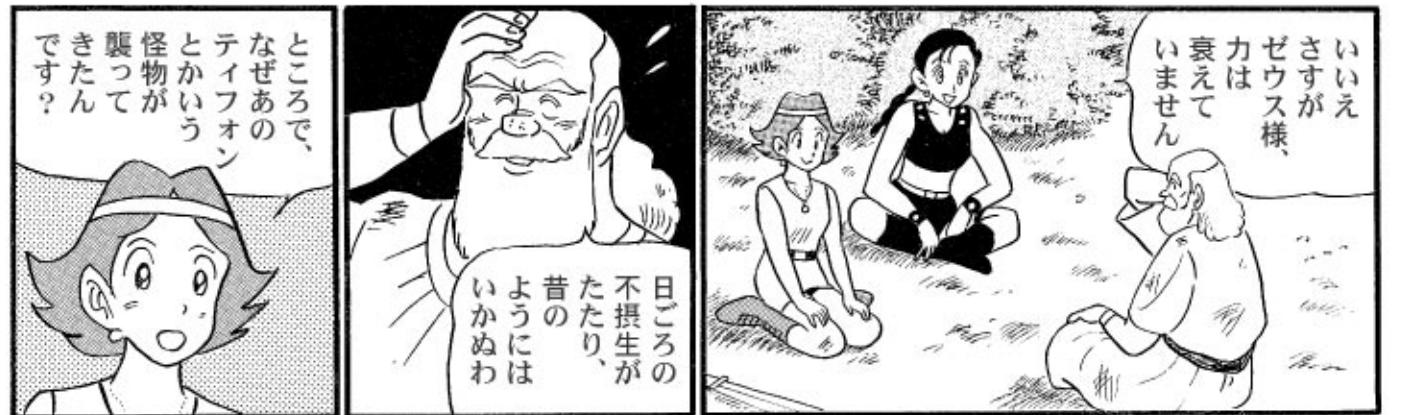
正調ギリシア神話では
うお座、みなみのうお座、
やぎ座、エリダヌス座

オリンポスの神々がエリダヌス川のほとりで宴会をしていると、ガイアの生み出した怪物テュフォンが襲ってきた。アフロディーテとエロスは魚（うお座）、アポロンはカラス、アルテミスは猫、ヘラは牛、バーンは山羊（やぎ座）など、動物に変身して逃げまどった。アテナとゼウスはテュフォンと戦い、シチリア島のエトナ山に追いつめる。ゼウスは神々の荒てぶりがおもしろかったので、変身した姿のまま、いくつかを星座にしたという。



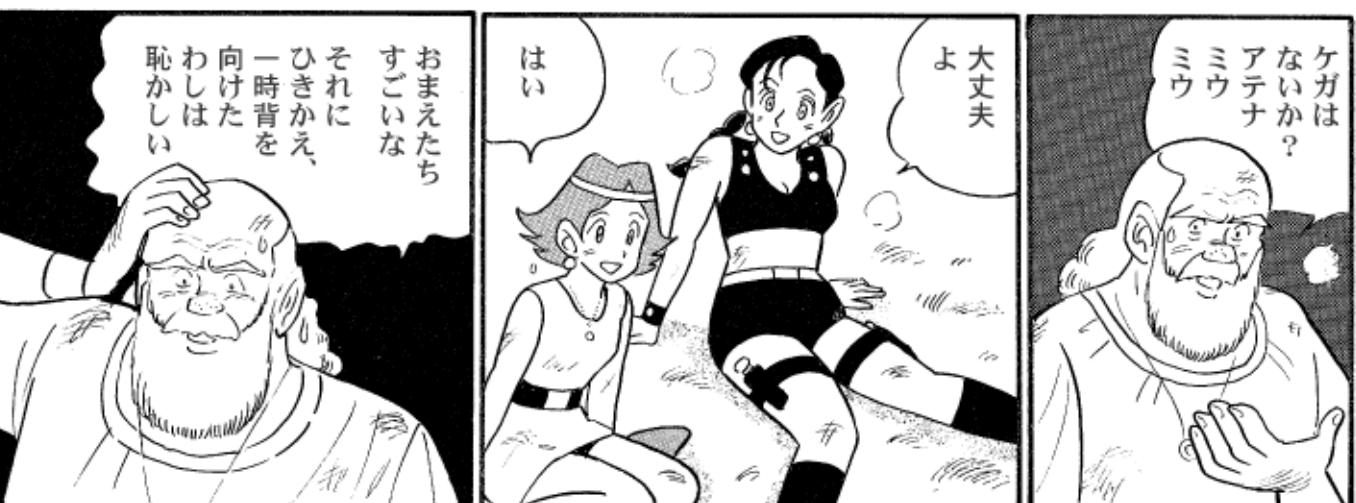
No. 041
金井三男のこだわり星座神話
宴會場となったエリダヌス川

オリオン座の南西端から南に向けて流れるエリダヌス川が、実在のどの川をモデルにしたかについて三説が提案されている。欧洲大陸を取り巻く大海に注ぐ仮想の川（ギリシャ初期の神話記者説）、エジプトを南北に流れるナイル川が同星座の輝星アケルナルを通り同じく南北に流れる天上の川に統く（エラトステネスやヒギヌス説）、イタリアのポー川（後期のギリシャ人）など。なお、ギリシャでは天の川を「川」とは見ず「道」と考えた。



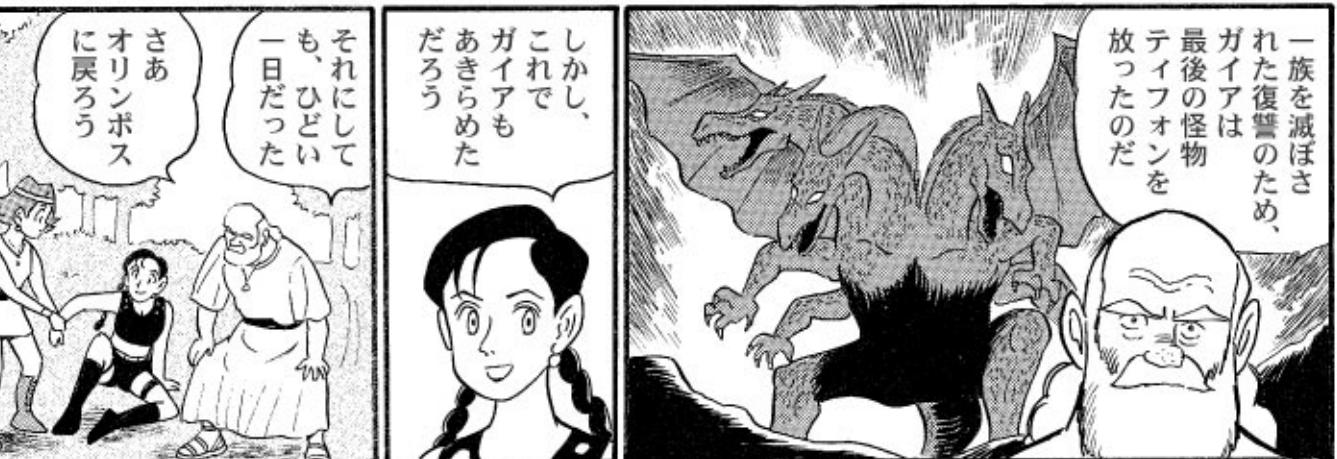
No. 043
金井三男のごだわり星座神話
季節を分かつ重要ポイント

神話時代には、おひつじ座に春分点・かに座に夏至点・てんびん座に秋分点・やぎ座に冬至点という暦学的に大事なポイントがあった。春分点は羊の放牧開始を、夏至点は蟹の横歩きから太陽がこれ以上北に行かないことを、秋分点は天秤をシンボライズして昼夜平分を、冬至点は山羊の崖登りを太陽が北へよじ登ることになぞらえて創られたという説がある。当否は別として、暦を重視する一考に値する星座起源説だと言えるだろう。



No. 042
金井三男のごだわり星座神話
やぎ座の起源はイラク

やぎ座はギリシャでつくられたものではなく、現在のイラク付近に住んでいたシュメール人が、その後同じ地域に建国したバビロニア人が創作したもの。古代シュメール語では、スフル・マーシュ・ハと呼ばれた。羊魚がその意味だ。当時、太陽がこの星座に進入する冬至の頃、同地域で雨季が始まることと関連つけられたもの。雨季とは関係ないギリシャでは、意味は転じてアイゴセロス（大きな角を持つ羊）と呼ばれ、魚の意味は薄れた。



正調ギリシア神話では
オリンポスの神々と
ティタン神の戦い

宇宙のはじめ、女神ガイア（大地）が誕生。ガイアとともに様々な神を作り出したウラヌスは、その後実権を奪われ、息子のクロノスが世界を支配する（ティタン神）。クロノスは自分の子どもらを恐れ、次々と飲み込むが、一人だけ助かった末っ子のゼウスが、兄弟を助けクロノスと戦い勝利した（オリンポスの神々）。ガイアは怪物テュフォンを産み、ゼウスらを襲わせたが、テュフォンはエトナ山に閉じ込められ、ガイアの野望は潰えた。

No.044
金井三男のごだわり星座神話
パーンのバニック

やぎ座の学名は、Capricornus（カブリコーン）だが、これは、ラテン語でカベル（山羊）とコルヌ（角）の合成語。ギリシャ語のアイゴケロスもほとんど同じ意味で、星座図でもひと目で羊と区別ができるほどの大きな角が目印となっている。恐慌とか錯乱とかの意味を持つ英語のバニックは、テュフォン来襲時の牧神パーンの慌てぶりから出た言葉で、やぎ座の学名のカブリコーンは、音楽用語カブリッヂ（狂詩曲）の語源にもなった。

神々にお酌をする「みずがめ座」

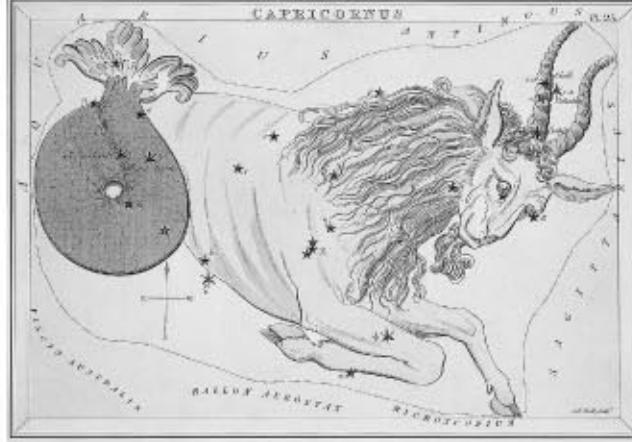
みずがめ座は黄道十二星座のひとつだが、大きいわりに目立つ星がなく、実際の星空ではちょっと存在感が薄い。目印は、ちょうど水瓶の位置にある、小さな「三ツ矢」マークを形作る星の並びだ。

この星座はトロイ国の王子ガニメデの姿だ。ガニメデは、鷦に変身したゼウスにさらわれ、オリンポスの酒を注ぐ神になつた。青年の神となつたガニメデは、いつまでもオリンポスで若々しく給仕をしたという。

木星（ローマ神話のジュピター＝ギリシア神話のゼウス）の四大衛星のひとつはガニメデと名付けられている。今もかいがいしく、ゼウスの給仕として周りを回つてゐるのだ。

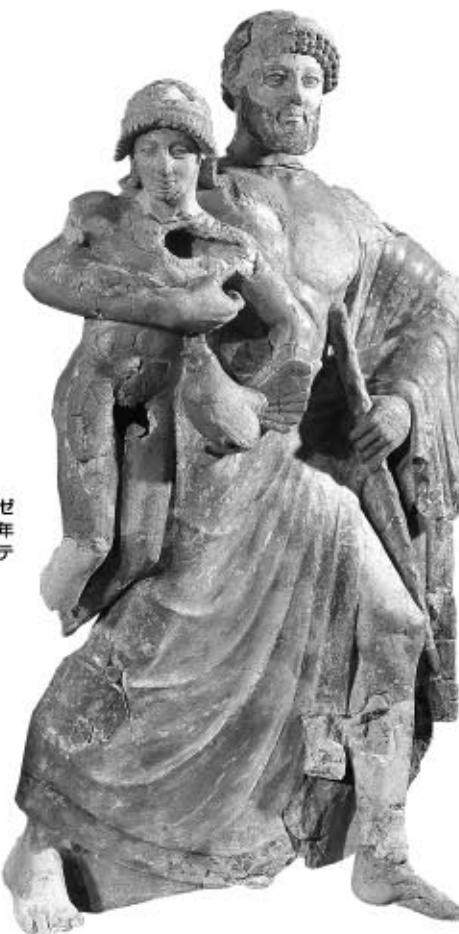
水瓶から流れた水は、ギーと南に流れて、秋の空の唯一の1等星、フォーマルハウトに行き着く。ここは「みなみのうお座」になる。

ウラヌスはガイアとともにこの世を使つた神族だが、息子クロノスに追放された。そ



ガニメデをさらうゼウス（紀元前480年から470年ころのテラコッタ細工）

上半身が山羊、下半身は魚という奇妙なやぎ座。牧神バーンが変身しそこねた姿だ。（リーの星座カード）



のクロノスも、保身から息子たちを飲み込んでしまう。ひとり難を逃れたゼウスは兄弟を助けて反撃し、こうしてゼウスが支配するオリンポスの時代になった。

ゼウスの支配を嫌つたガイアは、切り札として怪物テュフォン（台風の語源）を、オリンポスの宴会の場に送り込んだのだった。

あわてて逃げまどう神々。そんな中、アフロディーテとその息子エロスは、離ればなれにならないよう布で互いを結んで、ナイル川（エリダヌス川という説もある）に飛び込み、魚に変身して難を逃れた。

このときの姿が、布で結ばれた二匹の「うお座」の形になっている。実際の星座は暗い星ばかりで、その姿をたどるのはむづか

しい。

「みなみのうお座」もアフロディーテの変身した姿といわれる。一人が二つの星座になつてるのは珍しい。アフロディーテがゼウスの娘の中でも最も美しい神だったからかもしれない。

しかし、なぜか彼女が結婚したのは、最も醜い鍛冶の神ヘバイトスだった。この夫なら浮気はしないだろう、とう、身勝手な考えらしい。それとは逆に、彼女は多くの神と浮名を流し、多くの子供を産んでいる。その中でもエロスは恋を成就させる神として、キューピッドという名で知られている。

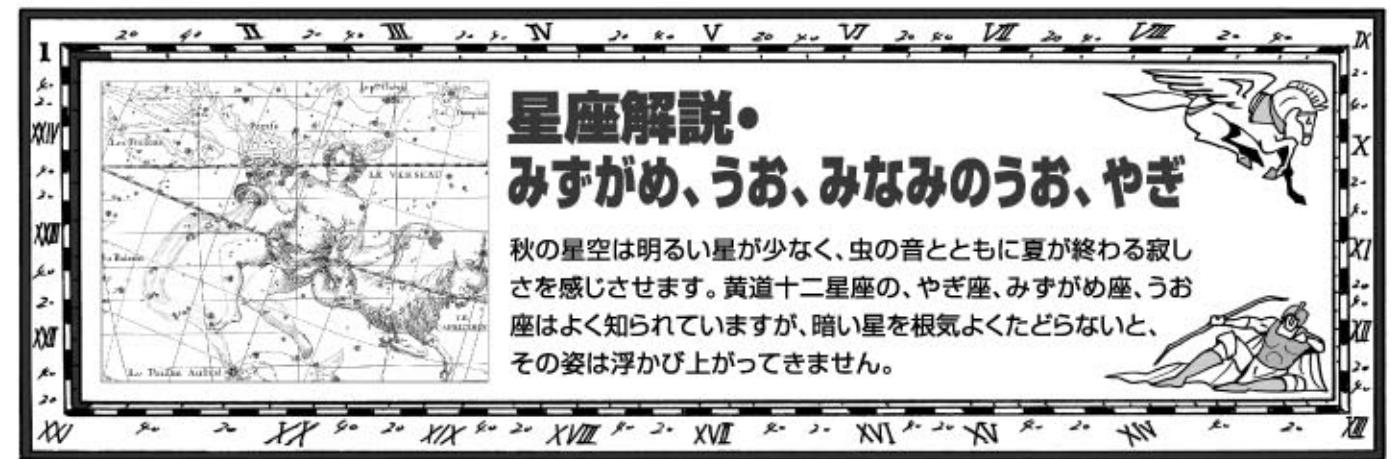
「やぎ座」はバーックの象徴

オリンポスの宴会を襲つたテュフォンに、一番驚いたのは牧神バーンだ。この神は生まれたとき、姿が山羊に似てため、驚いた母親は置き去りにした。父はゼウスらしいが、母はカリリストなど、いろいろな人物の名が挙がつてはつきりしない。

バーンは二つに育てられ、放牧と音楽の神になった。小心者の彼は、驚き方も半端ではない。テュフォンが現れたとき、真っ先に川に飛び込んで魚に変身して逃げようとしたまではよかつた。ところが、あわてていたため、身体の半分しか魚に変身できなかつた。

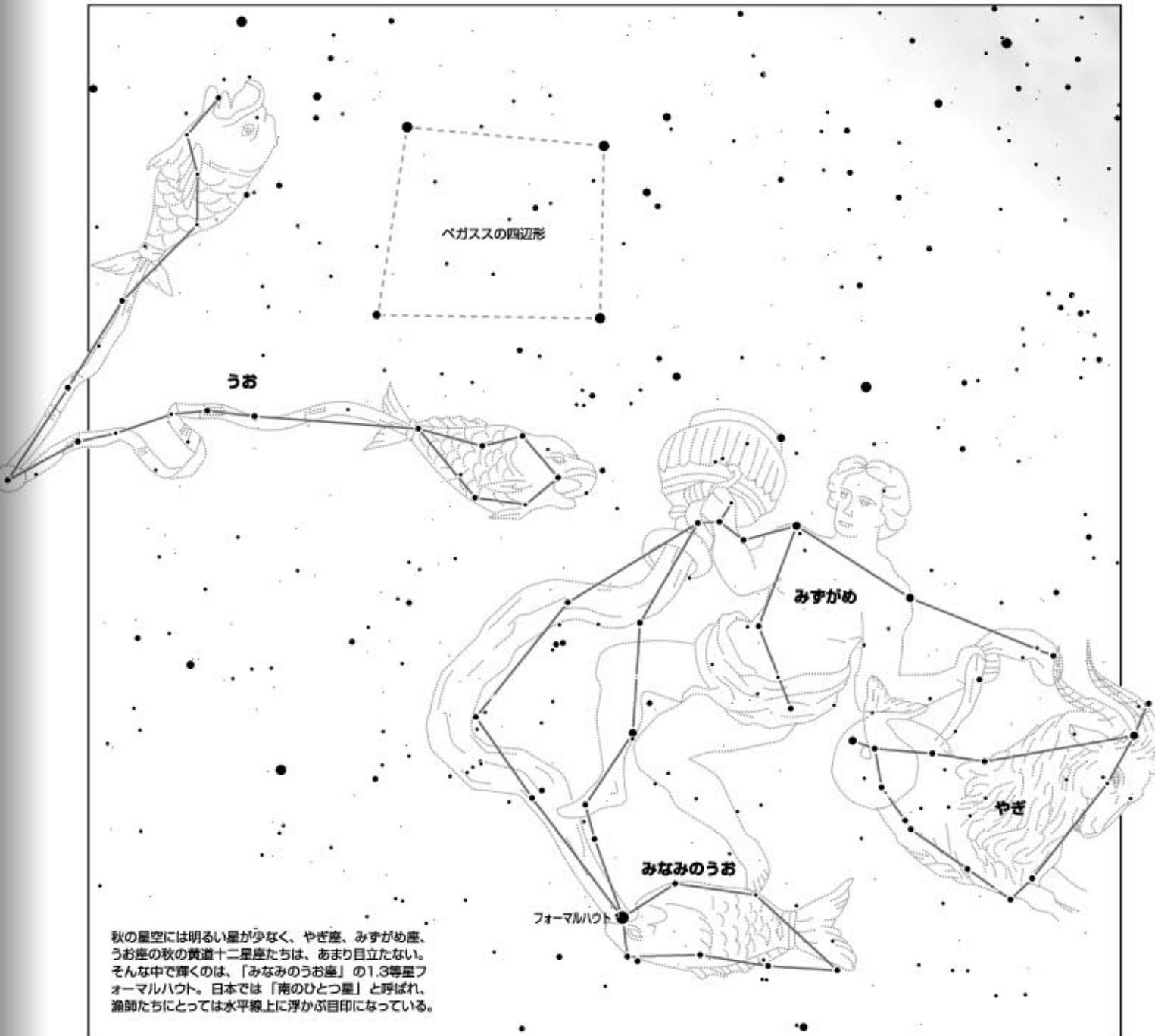
上半身が山羊で下半身が魚という、こうけいな姿がゼウスにうけ、「やぎ座」として天に上げられたという。バーンのようであつたためくことから、「バーック」という言葉が生まれた。

やぎ座は暗い星で構成されるが、この辺には他に目立つ星がないため、独特な力



星座解説・みずがめ、うお、みなみのうお、やぎ

秋の星空は明るい星が少なく、虫の音とともに夏が終わる寂しさを感じさせます。黄道十二星座の、やぎ座、みずがめ座、うお座はよく知られていますが、暗い星を根気よくたどないと、その姿は浮かび上がってきません。



秋の星空には明るい星が少なく、やぎ座、みずがめ座、うお座の秋の黄道十二星座たちは、あまり目立たない。そんな中で輝くのは、「みなみのうお座」の1.3等星フォーマルハウト。日本では「南のひとつ星」と呼ばれ、漁師たちにとっては水平線上に浮かぶ目印になっている。